

スポーツを解析する（その2）

テニス選手を通して見た技術変化

盛田 常夫

各種スポーツの技術は時代とともに変化する。当該スポーツの規則が変わる、あるいは技術が良く研究された結果、技法上の変化を生み出し、新たなトレーニング法が開発される場合である。たとえば、水泳などはこれである。とくに、平泳ぎやクロールの泳方はこの数十年の間に根本的に変化してしまった。我々が少年時代には、平泳ぎでは古川勝、自由形では山中毅が世界に誇る選手だった。古川は200米平泳ぎの最後の50米は潜水してしまい、見る方からは面白くなかった。そこから泳法の規制が生まれ、頭が常に水面上になければならないというようなルールが適用され、これを契機に上腕や上体を最大限に活用する今日の泳法が生まれた。クロールでも、昔はバタ足で推力を得るという考え方だったが、現在ではまったく逆で、前方にある止まった水を上腕で掻くことで推力を得る方法に変わった。実際、その方が速く泳げるのだから面白い。水泳の中継などで泳法を観察すると、中長距離の自由形ではほとんどの選手は舵を取るように、スローテンポで足を動かしているのが良く分かる。足ではなく上腕の力が推力になっている。

技術変化が生まれるもう一つの契機は、それまで競技人口が少なかったスポーツに、運動能力に優れた人々が参入して、その競技の基本的技法を変化させる場合である。その典型的なケースがテニスである。ほんの30年ほど前までは、硬式テニスのラケットは振り切ってはいけない、そうすると手首を痛めると言われた。今では軟式テニスのように、振り切る技法が当たり前になっている。これなどは、それまでひ弱な人々がやっていたところに、運動能力の高い人々が参入したことで、技法が変わった事例である。

クラシック・テニス

テニスが大メジャーなスポーツになったのは、ここ四半世紀だと言って良い。1970年代までいわばクラシック・テニスが栄えていた。この時代、ハンガリーにも国際舞台で活躍する選手がいた。1981年の全日本オープンで優勝したタローツィ・バラージュは当時のランキングで世界25位前後だったが、フォアはフラット（無回転球）、バックはスライス（後方回転球）と完全に打ち分けた典型的なクラシック・テニスだった。足が速く、アンティシペーションも良いので、非常にステッディなテニスができた。このトーナメントで九鬼との数分間のストローク合戦は新聞記事になった。1960年代から1970年代のテニス選手の世界モデルは、オーストラリアのローズウォールである。華麗なクラシック・フォームで、プレースメントに優れ、粘りのあるテニスをしていた。ハンガリーは土のコートを基

本とし、伝統的にストローク中心のクラシック・スタイルを受け継いでいた。

筆者の友人のマハーン・ロベルトもタローツィと同じ世代の選手で、バックのスライスを主要な武器として世界の舞台に出た選手だった。1970年代半ばの日本には、神和住、坂井、九鬼といった選手が国際的に活躍しており、四大大会の本選にも出ていた。当時、この三名がブダペストを来訪し、ハンガリー選手と試合している。マハーンはオーストラリア・オープンとウィンブルドンでも神和住と対戦し勝っている。1982年に日本に遊びに来た折、神和住に保証人になってもらってビザをアレンジし、私が勤務していた法政大学の体育会テニス部で臨時コーチをしてもらった。この年、法政テニス部は全日本大学王座を獲得し、村田選手が学生チャンピオンになった。その村田君が選手を代表してマハーンと手合わせすることになった。ラケットのガットが切れたために、マハーンは他の選手から借りたラケットで、村田君の最初のサーブを受けながらラケットの感触を確かめていた。村田君がサービスゲームを簡単にとったので、これは接戦になると期待していたら、後の6ゲームはあっと言う間にマハーンがとってしまった。あまり簡単にストローク・ミスをするので、村田君にその理由を尋ねた。「バックハンドのスライスがネットぎりぎりに来るだけでなく、落ちてから手元に伸びてくるので非常に打ちづらい」ということだった。土のコートでこれほど伸びるスライスは初めてだと言っていた。当時、マハーンは30代半ばで最盛期を過ぎていたが、まだデヴィスカップ要員で第一線の選手だった。さすがに格が違うと印象を持った。

今では考えられないことだが、1970年代から80年代にかけて、ハンガリーのテニスはヨーロッパでも強い方で、現役を引退した後は、ドイツやスイスにコーチ業に出稼ぎに行っていた。ドイツのテニスが興隆するのは、1980年代後半のベッカー出現以降なのである。

現代テニスの発祥

この1970年代から80年代にかけて、現代テニスを造った選手が活躍し始めた。スウェーデンのボルグ、アメリカのコナーズ、そして、チェコのレンドルである。

コナーズは女子のエバートとともに、バックハンドの両手打ちを始めた元祖である。この打法がアメリカで生まれたのは、明らかに野球のバッシングからのヒントである。ボルグもバックの両手打ちだが、彼の場合はトップスピンと呼ばれる前方回転の球を打ち始めた元祖である。同じ両手打ちでも、コナーズは典型的なフラット(無回転)打法だった。コナーズはバックの強い打球で、スライスを基本とする古典テニスを打ち破ったのだ。ローズウォールからコナーズへの時代の転換である。

まだATPランキングは漸く1973年に導入されたばかりで、1980年前後も現在のような厳密なポイント計算などおこなっていなかった。ヨーロッパの冬にはテニス団体戦のキングスカップという恒例行事があって、1980年1月だったと思うが、ジュールでハンガリーがフランスと対戦した。当時、住友商事ブダペスト事務所に勤務していた飯尾さん(現「大吉」店主)とこの試合を見に、ジュールまで出かけた。この時のフランスは16-18歳

のジュニアで選手を構成していた。その中の一人が、ルコントだった。この時、ルコントと対戦したのは前年の世界ジュニアを制したクハルスキーで、その後、スイスに亡命し、彼の地でデヴィスカップ要員になった。スイスが強くなるのは、それから後のことである。時の流れは早いもので、すでにルコントも引退してしまったが、左利きの少年ルコントはコナーズをそっくり真似たテニスをしていた。強くなると思ったら、案の定、トップテンまで上昇していった。それほどまでに、コナーズは新しい時代の世界モデルであった。

バックの両手打ちとフォアのトップスピン打法は 1980 年代の流行になったが、そこに立ちふさがったのが、怪物レンドルである。レンドルの登場はコナーズやボルグとは別の意味で、テニスに革命を起こした。それは途轍もないパワーである。バックの片手打ちで、強いフラット打球が打てた。190 センチを超える身長と頑強な体から繰り出される打球は、クラシック・テニスに引導を渡しただけでなく、バック両手打ちをも凌駕し、再び片手打ちの時代をもたらした。怪物少年レンドルには、タローツィもまったく歯が立たなかった。要するに、レンドルのパワーはそれまでのテニスの技術をまるかに超えるものだったのだ。まさに、現代のパワーテニスはレンドルから始まる。パワーが技術を超えたために、新しい技術を要する時代が来るという「スポーツにおける革命」の典型例である。1980 年代はまさにレンドル時代であった。

パワーテニス時代

女子のウィリアムズ姉妹とダーベンポートの出現で、現在の女子テニスも完全にパワー時代に突入した。とにかく、男子にも劣らない体格と運動能力は女子の世界では別格である。彼らのパワーの前には、トップスピンの正確なブレースメントでトップの位置を保ってきたヒングスも影が薄い。ウィリアムズのパワーはヒングスの技量を超えてしまっている。セレシュのパワーすら通用しない。時速 180 キロを超えるサーブを打ち、誰にも負けない運動能力がある。敵なしである。体の大きいダーベンポートは柔らかい手首から繰り出すストロークが強みだが、如何せん足が遅く、しばしば球を追わずに「怠惰」になるから、ウィリアムズ姉妹には勝てない。

力と勝負するには、それなりの力が要求される。だから、今、ウィリアムズ姉妹と戦えるのは、男性的なテニスをする選手たちだ。エナン、クライシュテルス、モーレスモなど、フランスとベルギーの選手たちが、辛うじて、ゲームができる。面白いことに、フランスやベルギーには、以前から、男性的な女子選手が輩出する。伝統的にチェコ的女子も、男性的なテニスをする。ナブラチローヴァがその典型で、その前の時代を築いたマンドリコーヴァもそうだった。ナブラチローヴァは歴代女子選手の中で、唯一のサーブ・アンド・ボレーの選手である。レスピアンを公言したことで知られている。女子の選手は男子の選手やコーチと練習するので、練習パートナーの技法を模倣するケースが多いと考えられる。それにしてもベルギーやフランスの女子には男性ホルモンが多いような選手が生まれてくるのはなぜだろう。社会の解放度に関係するのかもしれない。

先日、ユーロスポーツを見ていたら、オーストラリア・オープンで、小柄なエナンが男子選手を「スパーリングパートナー」にしている風景が映し出された。体が小さい男子選手がゲーム前の練習パートナーとして臨時に雇われる。このようなアルバイトのスパーリングパートナーが存在する。そうでもしないと、あのウィリアムズ姉妹とはゲームにならないのだ。

テニスの選手を見ていると、国民性が現れることもあって面白い。ロシアのクルニコヴァやサフィンなどは、並外れた体力を持っているが、ここという時の粘りが無い。こらえ性がない。甘やかされて育った典型的なロシアの若者というイメージが見えてくる。ナブラチロヴァは別格だが、チェコ出身のレンドル、マンドリコヴァ、ノヴォトナは常に世界のトップランキングに名を連ねていたが、この三人ともなぜかこ一番の勝負に弱かった。長い間トップランクにありながら、四大大会の勝利数が非常に少ない。技量や体力を超えた精神面の強さに、共通の問題が見られる。チェコ人の気質を知らないのでも何とも言えないが、チェコ人の精神の一面が垣間見えて不思議だった。

ハンガリーの女子にも、1980年代初めに世界のトップテンに入った選手がいた。テメシュヴァーリ・アンドレアである。彼女の両親はともにオリンピックのバスケット選手である。小さい時から親父がコーチをしていた。1979-80年頃に、ブダペストのジュニアの試合で彼女を見ているが、試合中に親父が大きな声で怒鳴り、アンドレアが怒鳴り返しているのが印象的だった。1981年に日本でフェデレーションカップがあり、ハンガリーの選手団の一員で参加していた。マハーンから監督の面倒を見てくれと言われていたので、選手と一緒に銀座に繰り出したが、そのときの会話でアンドレアはあまり賢くないという印象をもった。その翌年からテメシュヴァーリの世界ランキングが急上昇し、世界のトップテンに入るようになったが、長く続かなかった。

テメシュヴァーリはファザコンからか、親父の反対を押し切って、かなり年配の医者と結婚し、親父との縁を切った。テニスにはまったく素人の連れ合いが球出しなどの手伝いをしながら、トーナメントを回っていたが、案の定、ランキングは見る見るうちに下がってしまった。プロのコーチをつけない彼女は馬鹿だと批判する人が多かった。しかし、これも人生である。現在は別の男性と再婚し、ブダペストに住んでいる。親父さんの方はパシャリティ通りの Vasas クラブのコートで、素人相手のテニスコーチをしている。

男子は戦国時代

面白いことに、コナーズ、ボルグ以後、バックハンドの片手打ちの選手が男子のトップの座についている。レンドル、ベッカー、エドバーグ然り。1990年代を支配したサンブラスはオールラウンドのプレーヤーである。オールラウンドというのは、すべての球種の球を打つことができ、ストローク・プレーだけでなく、サーブ力があり、サーブ・アンド・ボレーもできるということだ。これは両手打ちの選手ではできない技術だ。レンドルがストローク主体の選手だったのにたいし、レンドルにないサーブ・アンド・ボレーで

も最高の技術をもつことで、レンドルのパワーを凌駕することができた。バックを両手打ちにする選手は、強烈なバック・ストロークが武器になるが、他方でバックの球種がスピンかフラットに限定されるだけでなく、ネットでのボレーに融通が利かない。だから、バックを両手打ちする選手に、サーブ・アンド・ボレーの得意な選手はいない。男子にも、フォアとバックともに両手打ちする選手は何人かいるが、その成功度は高くない。フォア、バックとも強い球を打てるが、球種が限られテクニックが限定されるからだ。

サンブラスが歳をとるにつれ、男子のテニス界はバックの両手打ちの選手が世界のトップの座に就くことになった。それがアガシであり、ヒューウィットである。彼らの武器は、ブレースメントが良く効いた強烈なストロークである。両手打ちによる並外れた力が、片手打ちのオールラウンド技術を凌駕したように見える現象である。

しかし、昨年来、男子のテニス界は再び新たな方向に向っているように見える。バックの両手打ちの力に対抗できる片手打ちの選手が、続々と出現している。アガシやヒューウィットのバック・ストローク力に劣らないバック・ストロークを片手で打つ選手が出てきている。そのうちの一人が、タイのスリチャパーンである。彼は2002年を通して、ウィンブルドンでアガシを倒しただけでなく、トップテンにいた選手すべてに少なくとも一度は勝利している。2002年のATP Most Improved Player Awardと2002年Stefan Edberg Sportsmanship Awardを獲得した。これらの受賞は2003年のオーストラリア・オープンに参加した選手の投票で決定されるから、選手にとって最も印象に残った選手が受賞したとも言える。

スリチャパーンは今、タイのスポーツ界の英雄であり、アジアからは松岡修造以来、久しぶりに出現したホープである。彼の技術の基礎は、強靱な肉体である。下半身に安定感のなかった松岡に比べ、スリチャパーンは上肢も下肢も、柔らかい筋力で固められている。テレビ画面で見ると、太股の筋肉は他のテニス選手とは異質である。インターバルのシャツ交換で見せた上半身の筋肉は、アガシやヒューウィットとは比べ物にならない。絞り込まれた185センチ75キロの体が、世界のトップと渡り合える力の源である。難を言えば、走力だろう。

今、男子のテニス界は完全な戦国時代に入った。常に新しい選手が出現している。下克上の世界である。両手打ちと片手打ち、パワーと技術の罅迫り合いが、激しく続いている。日本からも松岡やスリチャパーンに次ぐ選手が出てきて欲しい。